

## 陰画としてのヒロイン

— Re-version of Mansfield Park

永 富 久 美

### I

帆柱の上から見張りをおさおさ怠りなく、万全の注意を払って操舵していく作者のモラルの強制力が、ヒロインの結婚という彼方の目的地から発信されてくる幸福と安定のメッセージによって心地よくかき消され、自由で安全な航海を演出してしまうオースティンのコーパスにおいて、『マンスフィールド・パーク』は、その枠組にすっぽりと入り切らない、ある種の違和感を感じさせるテキストとなっている。例えばその違和感を「不安」<sup>1)</sup>という言葉で置き換えることができるとして、その不安の原因をつきとめようとしてきた批評家たちは、多かれ少なかれファニー・プライスというヒロインの反ヒロイン的特性に着目してきた。「内気で意気地がなく虚弱ながらも、どこかまじめくさった」<sup>2)</sup>ファニー・プライスは、「これまで活字となって現われた人物のなかでもっとも魅力的」<sup>3)</sup>だとオースティン自身が称揚するエリザベス・ベネットの持つヒロイン的な特性を、ほとんど持ち合わせていない。散歩をしてもすぐ息切れし、愛する従兄のエドモンドと恋敵のメアりに置いてきぼりをくわされて歯軋りしたり、長い忍従の末やっと伯父のサー・トマスに認められ、晴れのダンスパーティで露払いの大任をまかされながら、宴の途中で「息が切れ、手で脇腹を押さえなが」ら「踊るというよりも歩いている」<sup>4)</sup>といった体たらくの「可哀相なファニー」(MP,87,253)は、確かにその「劣等性」が「彼女の身体に消し去りがたく刻印された」<sup>5)</sup>、ひ弱で魅力に乏しいヒロインだ。彼女の道を誤ることのない「美德」とは、善への積極的な意志と行為の結果というよりも、虚弱さと結びついた「動きのなさ」<sup>6)</sup>のおかげであるという見解がきわめて妥当な響きを帯びて聞こえるほどに、ファニーの不活発で内向的な気質は際立っている。しかしまた同時に、「依存的で控えめであり、およそ欲望といったものは持ち合わせていない」と見えるファニー

が、いわゆる「礼儀作法にかなった女性 (Proper Lady)」<sup>7)</sup>の条件を満たしていることも否定できないのであって、とすると明らかに「道徳的な人物」<sup>8)</sup>として設定されているこのヒロインが、何故かくも影の薄い存在にならなければいけなかったのかという点が、奇妙な謎として読者を困惑させることになるだろう。

こうしたファニーの人物造形は、『マンスフィールド・パーク』のストーリー展開の危うさと、紛れもなく連動している。人前に出るのを恐れるファニーの控えめな性質を表す挿話はいくつもあるが、その「控えめ」とは女性らしい慎ましきとといったものよりも、むしろ小動物的な怯えに近い。貧乏な親類の娘としてパートラム家に引き取られてくるファニーは、最初から劣者としての烙印を決定的に押され、周縁に位置付けられる運命にある上に、叔母のミセス・ノリスの態度は不愉快そのもので、こうした一切の処遇は確かにファニーにとって脅威的に働きかけるだろう。だが意気地なく涙にかきくればエドモンドからの慰めをあてにする彼女の哀れっぽさは、容易には読者の同情心をかきたてない。さらにファニーの内気な涙は、実は弱者という立場を強調してエドモンドの正義に訴えようとする戦略ではないかという醒めたりアリズムの眼差しが読者の内に喚起されるのは、ファニーが今までの弱々しい態度とは打って変わって、突然「モラルの人」としての冷徹な一面を顕にするときである。パートラム家の人々とクローフォード兄妹が揃ってラッシュワースの屋敷を検分に出かける場面で、エドモンドにむかってひとしきり牧師一般についての罵詈雑言を並べたメアリは、その直後にエドモンドが牧師になる予定であることを、<sup>9)</sup>彼の妹のジュリアから聞かされる。

ジュリアが語っているときのメアリ・クローフォードの表情は、全くの第三者にとっても見ものだったにちがいない。彼女はこの耳新しい事実を聞き

ながら、驚きとショックでほとんど愕然としていた。ファニーは彼女を気の毒に思った [Fanny pitied her]。(MP,79)

「オースティンは自分のまわりに集めてきた男女を裁く審判官ではない。彼らの作法を直す検閲者ではない」<sup>100</sup>という評言に見られるように、オースティンの語り手は稀にしか姿を現さず、概ね見えない全知の存在として、メタレヴェルから登場人物についての事実確認的風な陳述を繰り返して行く。このようにして語り手の一見ニュートラルな発言にモラル的な弾劾や揶揄をこめる作法はオースティンの常套であるけれども、その手法がとりわけファニーに関する語りにおいては、アイロニーの強度を即断できない微妙なレヴェルで多用されており、そのことが『マンスフィールド・パーク』というテキストの読解を困難にしている原因のひとつであると言えるだろう。上述の引用では、一見そのままにも読めなくはない最後の文に、おそらく強烈なアイロニーがこめられている。このテキストでは「一番身分が低く、しんがり」(MP,199)のファニーに、誰であれ他人をストレートに非難する言葉の使用は許されていない。そのファニーがクローフォード兄妹に対しては比較的はっきりと嫌悪の言葉を用いているのは、この都会からやってきた兄妹が物語の最初からはっきりと闯入者という「型にはまった人物」<sup>101</sup>に据えられているからだ。恋敵と呼ぶにはあらゆる点で格段の優位を誇るメアリに対し、ここではファニーの嫌忌の念は「気の毒に思った」という高みからの視線にすり替わることによって、一層頑なにメアリをはねつけている。

だがファニーがものものしい裁判官のように、道徳という価値基準から他者を裁断するときの生真面目な頑固さと、人目に曝されることを恐れて誰かの陰に隠れてまわる気の弱さとの間には、どこか齟齬があるように思われるし、先程の引用箇所に見られるような言葉と心情の乖離は、ファニーをヒロインにふさわしい地位へ高めるといっても、むしろ真意をはっきり表さない嫉妬心の強い人物像へと接近させている。「誰も彼女を恋したりはしない」<sup>102</sup>とまで言われるファニーのような人物をヒロインとして物語を進めていくことの困難さは想像に難くなく、よってテキストの半ばを過ぎた頃から始まるヘンリのファニーに対する恋のプロットは、唐突の感を免れない。そのことにオースティン自身も自覚的であると思われるのは、ややとってつけたような語り手の介入からもうかがわれる。

いかなる才能、作法、懇懇な心づかい、おべっかを絵動員したところで、心を征服されたり、意にそまない恋に陥るようと口説き落とされたりすることなど決してない、歳の頃18くらいの淑女というものも、この世には当然存在するが(さもなくばそのような女性の物語が書かれるはずはない)、私はファニーがその中のひとりだと信じる気持ちなどさらさらなし、彼女のように優しい気質と豊かな趣味を備えた人物が、クローフォードのような男性の求愛(たとえ2週間程度のものであったとしても)から心に全く傷を負わずして逃れることができるなどということは、たとえ彼が以前からファニーに悪印象をもたれていて、その点を克服しなければならぬという問題があったにせよ、もし彼女の愛情が他の人物に注がれているのでなかったならば、決して起こり得ただろうとは思わない。(MP,208)

さらにファニーのことを最初はいいた改善の余地なしと考えていたサー・トマスの予想は覆され、いつの間にかファニーの「顔色」も「表情」も「姿形」もすっかり「よくなっている」(MP,178)のだが、このファニーの蛹から蝶への羽化の過程は、読者にとってはやや寝耳に水の感があり、ここでもまた語り手は幼かったファニーに対するサー・トマスの愛情に欠けた接し方は、単に彼の「判断の誤り」(MP,431)にすぎなかったと弁明してみせるのである。

このようにヒロインらしからぬファニーは、テキストのあちらこちらにぎこちなくぶつかっては、物語のつづがない進行にほころびを作っていく。最終的にはヒロインの結婚に持ち込まれるというハッピー・エンディングによって、オースティンの他の小説と一致する『マンスフィールド・パーク』というテキストは、しかしヒロインの造形以外の様々な点においても、その他の小説では見られなかった視点やテーマを取り入れた「実験小説」——この言葉はいかにもオースティンにそぐわないけれど——としてとらえることができるだろう。だとすれば、ファニーの反ヒロイン的な要素とストーリーの強引な運びは、どちらかを優先させた明確な因果関係にあるのではなくて、換言すればオースティンはファニーのようなこれまでにない鈍重なヒロインを描くことに熱意を燃やしていたわけではなくて、彼女の反ヒロイン的な造形は、オースティンが諸々の実験

を試みた結果現われた物語構造の持つ内的ロジックと分ちがたく連動しているのではないだろうか。このテキストが他のオースティン作品との間に打ち出した差異の構造を解き明かすとき、その他の作品ではこれまではっきりと見えてこなかった作者のイデオロギーを読み取る作業を可能にしてくれるのが、他でもないこのファニー・プライスという人物だという可能性はないのだろうか。

## II

「田舎の村の3つか4つの家庭こそが、小説の格好の題材となるのです」<sup>13)</sup>といった言葉を口にする人物にとって、「家庭」とは果たしていかなるものであったのか、興味のそそられるところである。例えば『分別と多感』において、エリナとメリアンは父の死後、異母兄のジョン・ダッシュウッドとその吝嗇家の妻によって、実質上家を追われる。『高慢と偏見』のミセス・ベネットは「劣った理解力と乏しい知識と落ち着かない気性」の厚顔無恥な母親で、妹のリディアははすっぱ、才気とユーモアを持ち合わせたミスタ・ベネットも、結婚後まもなく妻への愛情がさめ、「田舎と書物」の世界に没頭し、夫としての「義務と作法」に欠けるといった按配なので、「もしエリザベスの見解がすべて、自分の家族を基にして引き出されたものであったならば、彼女は夫婦間の幸福とか家庭の安らぎといったものについて、さほど愉快的絵を描きだすことはできなかつただろう。」<sup>14)</sup>『説得』のヒロイン、アン・エリオットは「淑やかな心とやさしい性質」の持ち主であるにもかかわらず、自己中心的で偏見に満ちた父親のサー・ウォルターは、「彼女に対して何の愛情も持ち合わせてはいなかった。」<sup>15)</sup>『マンスフィールド・パーク』の冒頭で紹介されるように、ミセス・ノリス、レイディ・パートラム、そしてファニーの母親のミセス・プライスは3姉妹であるが、甥のトムが病気になったという知らせを受けても、ミセス・プライスはほとんど関心を持たず、というのもこの姉妹たちは、「随分長い間別れ別れで暮らし、境遇も大層違うので、血のつながりはないも同然だった。」

互いへの愛着の念も、もともと彼女たちの気性同様に穏やかなものであったから、今では単なる名目上のものとなっていた。ミセス・プライスのレイディ・パートラムに対する同情は、レイディ・パートラムがミセス・プライスに対して感じただろうと思

われる同情と、似たり寄ったりであった。ファニーとウィリアム以外なら、プライス家の子供たちが3、4人——どの子であれ、あるいは全員であれ——さらわれていったところで、レイディ・パートラムはほとんど何とも思わなかつたろうし、ひょっとするとミセス・ノリスの口から、可哀相な妹のプライス夫人も、子供たちの世話をあんなに十分にみてもらえて、大変な幸せ者よ、有り難いことだと思わなくてはなどという紋切型のお説教が聞かれたかもしれない。(MP,390)

村の3つか4つの家庭の相互間で展開されるドラマと同時平行的に演じられる個々の家庭や身内間での家族劇が、実は相当深くまで入っていると思われる亀裂をふまえた上で成立していることを一方で明示しておきながら、他方でその亀裂を文字どおりの亀裂と読ませないために、喜劇の度の強い眼鏡を語り手にかけさせて、およそ崩壊という言葉が無縁に思われる安定した小説世界を生み出そうとするオースティンの屈折した物語作法を通して、家庭という概念と切り離しては考えられないこの作家が抱いていた家族観の複雑さを透かして見ることができるだろう。

しかし重要なのは、オースティン個人の家族観ではなくて、彼女の描く安定した小説世界の構造が、逆説的なことではあるが、すでに亀裂の入った家庭を必要としていたという点だ。この問題は多少の考察を必要とする。というのも個々の家族同士が緊密につながり合って一個の家族のような共同体を形成しているオースティンの社会においては、家族といった場合に、いわゆる厳密な意味での血縁といった概念がどこまで求められているかを確認しておく必要があると思われるからだ。

興味深いのは、狭い共同体内での出来事のみを扱っている割には、普通そのような場合に想像される「閉鎖的」といった表現が、オースティンの社会にはそぐわない。「開放的」であるというのではないけれど、共同体の「内」を「内」と認識させるような対抗的な「外部」が提示されていない。だからこの共同体は、誰に対してあれ門前払いをくわせるようなことはない。とはいえコリンズ氏はベネット家の遠縁にあたるし、フランク・チャーチルはエマの家庭教師であったミス・テイラーが嫁いだウェストン氏の息子、ジェイン・フェアファックスはミス・ベイツの親類、クローフォード兄妹は、マンスフィールド・パークに住むグラント氏の妻の

義理の弟妹といった具合に、新参者は大抵共同体の中に縁者を持つ。たまに例外もあって、「イングランドの北部」からやってきたビングリー氏は全くの余所者であるけれども、

[かなりの財産を持っている独身の男は、妻を欲しがっているに違いないという]真理が彼の近所の家の人たちの心にしっかりと根をはやしているので、その男性は自分たちの娘のどれかにとってふさわしい資産であるとみなされる (PP,1)

から、ビングリー氏も未来の縁者として諸手をあげて歓迎されることになる。そして当然ながら彼らの到来と共にもたらされる新しいドラマは、小説自体にとっても二重の意味で喜ばしいことである。ひとつにはもちろん新しい物語の展開が約束されるという意味で。もうひとつは共同体内部の行き来が活発になって、見せかけの絆が補強されることになるからだ。エマ・ウッドハウスは、オースティンのヒロインたちのうちでおそらくもっとも人に愛される気立てのよい令嬢である。彼女は父の親しい知人である貧しいベイツ母娘のことをうとんじているが、ある日ハリエットと散歩の途中に、母娘を訪問してみようという気になる。

このように訪問する理由など、常日頃から十分にあった。ベイツ母娘は訪問を受けるのが大好きだったし、エマは無礼にも彼女に欠点を見いだそうとする少数の人々から、彼女がこの訪問をおろそかにしており、ほとんど慰めを持たない母娘の生活のために、然るべき貢献を果たしていないと思われることを知っていた。自分が礼儀を欠いていることについては、ナイトリー氏からも常にほめかされていたし、自分でも時々そのことに気づいてはいたのだが、その訪問がひどく嫌なもので——時間の浪費であり——彼女たちが退屈きわまりない婦人たちであるという確信があったし、またいつも母娘を訪ねてきているハイペリーの二流、三流の人々と鉢合わせするという危険に対する恐れもあって、そうした理由を打ち負かすほどのものは何もなく、従ってエマはめったに母娘に近寄らなかった。しかし今、彼女たちの家の前を素通りするわけにはいかないと突然心に決め、ハリエットにそう言いながら、日にちを数えてみた限り、今ならジェイン・フェアファックスからの手

紙についてくどくど聞かされずにすむはずだと目算をたてていた。<sup>16)</sup>

2年ぶりの姪からの訪問をひかえて興奮の絶頂にあるミス・ベイツを、わざわざ今訪れるエマの計算能力は疑われて然るべきだ。実際もっともらしい言い訳を付け足してはいるが、エマがジェインについての情報を欲していることは歴然としている。何故ならエマは「ジェインのことが好きになれず」、ナイトリー氏に言わせれば、「それはエマがジェイン・フェアファックスのうちに、完璧な若い女性の姿を見い出しており、エマ自身が人にそう見られたいと思っているから」(E,148)である。

ここで着目したいのは、エマのジェインに対する嫉妬心——その逆についても同様のことがあてはまる——が、『エマ』というテキストの中に無数にちりばめられているストーリーのひとつを形成しているといったことではなくて、本当の理由は何であれエマがベイツ母娘を訪問することになった理由のひとつに、彼女をテキスト世界の主流派へと突き上げる少数派の眼差しが多少なりとも関与していたという点である。別の場面で、買物の途中にミス・ベイツに捕まったエマとハリエットは、またも彼女のおしゃべりの奔流に襲われる。ピアノのこと、眼鏡のこと、焼きリンゴのこと、ジェインの食が細かいこと、リンゴを届けてくれるナイトリー氏の親切さ等々について、エマにほとんど口を開く隙を与えず、数ページにわたってミス・ベイツの語りをうながすオースティンの意図は問われるべきである。何故エマを嫌う少数の人々を登場させずに、その少数派の階級を代表する人物として、エマを嫌っているわけではないミス・ベイツの語りを前景化するのだろうか。

姪のジェインへの愛も焼きリンゴへの愛も、等価に語ってしまう彼女の無意味な言葉の羅列は、エマの神経を苛立たせる。その苛立ちとは、世界を意味のあるものとして解釈したい主流派としての感情だといってよいかもしれないが、気立てのよい、人好きのするヒロインを描こうとしながらも、オースティンは、エマのこの経済的な苛立ちをはっきりとテキストに刻印する。この苛立ちは、エマを他の主流派と分かつ明確な示差特徴となっている。その苛立ちの表明に賛同するのは、おそらく二心あるフランク・チャーチルくらいだろうし、エマを毛嫌にする、もっと不愉快なミセス・エルトンに対しても、ナイトリー氏やミセス・ウェストンは、エマのような嫌悪感を抱いてはいない。だからこ

の苛立ちは、一方でエマをヒロインたらしめながら、同時にエマはどうしてもミス・ベイツの言葉からは逃れられないという代償を求められている。ミス・ベイツの水で薄めたような膨大なおしゃべりは、エマを真正面から糾弾するような性質のものではないけれど、じわじわと社会に浸透して、エマの領域を着実に侵す。この言葉の浸透度は、共同体とミス・ベイツの縁故関係の証左であり、エマを差異化しつつ、世界を喜劇的に包括している。従ってこのテキストの安定を保障するための、エマと彼女の擬似的縁者としてのミス・ベイツの絆は、あくまでも見せかけの融和として機能しなければならないのだ。

テキストを内部から切り裂く視線は、階級の少数派からだけではなく、身内の中からも見え隠れする。『分別と多感』で、エリナの母親の遠縁にあたるシャーロットの夫パーマー氏は、妻を軽蔑していて、一族の団欒の席でも常に不躱な態度をとる。その様子を観察していたエリナは、「彼が自分でそう見せたいと思っているほどの、根っからのひねくれ者だとか不作法だとか思う気にはなれなかった。」<sup>17)</sup>またエマの姉のイザベラと結婚したジョン・ナイトリーも、一日の終わりに家庭でくつろぐことをせず、親類や友人一同との集いに嬉々として馳せ参じるような交際好きとはほど遠い人物である。エルトン氏の結婚を祝ってエマが開いた晩餐会の日が運悪くジョン・ナイトリーの訪問の日とぶつかり、ジョンの交際嫌いを知っているエマは、彼が「48時間くらいは晩餐会にぶつからずにハートフィールドに行くことはできないものかとひどく不機嫌になる」(E,262)かもしれないと懸念する。その晩餐会の席で、ジョンは用事のため遅れてやってきたウェストン氏を見て、

口には出さなかったが、ひたすら驚いていた。ロンドンでの仕事に一日を費やしたあと、家で静かに夜を過ごすこともできただろうに、もう一度外出し、他人の家までわざわざ半マイルも歩いてきて、寝る時刻まで色々な人が入り混じった集まりに顔を出し、愛想をふりまきながら喧騒のうちに一日を終えるとは、全くのところ、彼をいたく驚かせるふるまいだった。(E,273)

パーマー氏もジョン・ナイトリーも、自分の妻を軽蔑している点で共通しており、妻の一族友人との交際を喜ばない。彼らはミス・ベイツと違って、ヒロインたちの特権的な立場を脅かしたりはしないが、彼らの不愉快

な態度に敏感に気づいているのが、他でもないエリナとエマというヒロインであることは興味深い。彼らの態度に同意するかどうかは別にして、少なくともエリナとエマは、一瞬にせよ彼らの視線をなぞったことになる。彼ら2人の婿は、どちらかといえば端役で、その批判的な眼差しが、テキストに決定的な亀裂を入れることはない。とすれば、このような小さなひびきを忘れずに記録することによって達成される可能性とは、彼らのような異物をも包摂してしまうことで、共同体の表面的な同族的結合をより一層強化すること、さらには、もしかするとヒロインが分かち持っていたかもしれない身内への批判を、彼ら端役に肩代わりさせることであったと言えるかもしれない。

パーマー氏やジョン・ナイトリーの批判の眼差しが、ささやかなものであるにもかかわらず多少の注意を喚起してしまうのは、オースティンの小説世界の表面をざわざわと埋めつくしている大半が女性だからである。ヒロインを含む家庭がほとんど女系であるという点は見逃せない。こうした家族設定は、作家の恣意的な、あるいは非リアリズム的な選択であったとは考えにくい。概ねヒロインの家族の紹介から始まるというパターンを繰り返すオースティンは、ダンスや晩餐会や恋愛といったヒロインたちの気をそぞろにさせればかりの出来事を手際よく提供しながらも、一方で相続といった辛気臭い話題を律儀に書き記すことを忘れない。限嗣相続や長子相続といった言葉は、オースティンの社会を規定する際の必須用語である。<sup>18)</sup>そして登場人物たちはこうした制度をそのままに受け入れている。「あなたの財産が自分の子供たちの手に渡らずに相続権が限定されるなんて、こんなひどいことが世の中にあるかしら」と叫ぶのは、このような問題はおよそ「理性の及ぶ範囲をこえて」(PP,54)いるとみられるわからず屋のミセス・ベネットくらいである。その意味で、既存の制度に抗わず、それを小説の中心柱に据えてしまうオースティンの政治的態度は、きわめて保守的であるといえるだろう。しかし『分別と多感』のジョン・ダッシュウッド、『高慢と偏見』のコリンズ氏、『マンスフィールド・パーク』のトム、『説得』のエリオット氏といった顔触れが予測させる未来は一樣に明るくない。<sup>19)</sup>こうした人物を相続人ないしは相続の可能性を秘めた人物に設定するところに、オースティンの何らかの意志表明を読み取ることは可能であるかもしれない。

男系相続のおかげで権利を剥脱されたヒロインたちは、言ってみれば社会にとっての私生児のようなもの

であるにもかかわらず、あるいはそれゆえに、彼女たちはよりよい結婚を得ることが——エリザベスはコリンズ氏よりも、そしてアンはエリオット氏よりもすぐれた夫を得ることが——半ば義務的に課されている。彼女たちの認知権がいわば社会にあると思わせる主たる理由は、『マンスフィールド・パーク』以外のテキストにおける父親の権力が、かなり弱められているためである。ヒロインと共通の視座にたつて物事を眺めることのできる良識ある人物としてある程度の好感が寄せられるのは、エリザベスの父のベネット氏くらいだろう。そのベネット氏にしたところで、娘のエリザベスの非難を免れ得ない。エリザベスは「父の態度が夫として不適當 (impropriety) であることについて、決して盲目になることはできなかった」(PP,209)ばかりか、父親としての義務も怠っていると考える。妹のリディアの品行に懐疑的なエリザベスは、彼女のブライトン行きを思いとどまらせるようにと、秘かに父親に嘆願する。

お父さま、もしあなたがリディアの途方もない元気を押し止めて、今のように男のあとばかり追い回していることがあの子の人生の仕事ではないのだということを教えてやろうとなさならなければ、リディアはじきに手の施しようがなくなりますわ。性格があままで固まってしまって、16歳にして自分も家族も世間のもの笑いにするような、どうにもしようのない浮気娘になってしまいます。いちばんたちの悪い卑しい浮気娘になってしまいます。[中略] ああ、お父さまはリディアとキティが、どこへ出しても非難されたり軽蔑されたりすることなどないと思っていらっしゃるのですか。あの子たちのせいで、姉たちがしばしば不名誉に巻き込まれたりすることなどないとお考えなのですか。(PP,205)

ここでのエリザベスの台詞は、まさに怠惰なベネット氏にとってかわり、父の権威を帯びようとしている。実際リディアのブライトン行きに反対して、彼女を家に閉じこめておこうとするエリザベスと、「行かせてやればいいさ」と軽く応酬するベネット氏では、立場が逆転しているように見える。

妹たちの不品行が、自分と姉のジェインの名譽まで汚すとエリザベスが懸念していることからわかるように、リディアはエリザベスの考える恥そのものである。そしてリディアが外で犯すかもしれない恥に対す

るエリザベスの恐れは、士官たちを追いかけて「外に出る」ことを無上の喜びとしているリディアを「閉じこめたい」という欲望となって現われている。だが分別のあるジェインやエリザベスの妹にしては、あまりにも不出来であると思わずにはいられないこのリディアの造形は、実はエリザベスにとって格好の隠れ蓑になっているのではないか。妹や母親の不法にうんざりさせられ、一方でダーシーという男性に心を惹かれていく過程で、果たしてエリザベスの中に、外へ出たいという願望はなかったのだろうか。リディアはまさに、「そうでなければエリザベス自身が受けたかもしれない非難を招きよせてくれるおとり」<sup>(20)</sup>だったのだと言えないだろうか。

リディアの無分別な遊び好きや愚かな駆け落ちを強調して、エリザベスの外への志向を見えにくくするという操作は、父の力の弱さとも無関係ではない。リディアの性格を矯正するよう、エリザベスは父に訴えるが、父からの圧力や干渉を受けずとも、エリザベスは良識と分別を備えた娘に成長しているように見える。このことは、父親のいないエリナとメアリアン、幼児さながらの父親を持つエマ、父親が自分に何の関心も持っていないアンについても同様である。このような父親との接触のなさ、ヒロインが結婚して外に出ていく際の軋轢を押さえ、出ることを自然なものとする役目を果たしている。というのも彼女たちが外に出るためには、一見そうとはみえないが、ある微妙な手続きを必要とするからだ。

リディアのような恥知らずな娘と、礼儀作法を心得たヒロインたちの違いは、ある肉体上の差異となって現われる。すなわち「完全に社会化された身体」を持つジェインやエリザベスが「顔を赤らめる」のに対し、「社会化に失敗した」リディアの場合は、「顔を赤らめることができない」<sup>(21)</sup>しかしヒロインたちが顔を赤らめる「狼狽ぶり」が、「オースティンを読む喜びのひとつ」<sup>(22)</sup>であるとしても、頬の赤らみという表層的な徴候を、一様に身体の内側に刻み込まれた社会的な礼儀作法の現われだと括ってしまうのは危険だろう。頬の赤らみが礼儀作法を知っている印であるとしても、ヒロインたちが頬を染めるのは、恥じらいのせいばかりでなく、自ら恥さらしな行為に身を委ねて、恥そのものとなった結果かもしれないのだから。

叔父と叔母の旅行に同行したエリザベスは、叔母の要望に従ってダーシーの屋敷があるペンパリーに立ち寄ることになる。すでにダーシーからの求婚を退けて

いるということを経母に打ち明けられないエリザベスは、そこで偶然彼に出くわしたときの狼狽を想像して困り果てるが、現在ペンバリーには誰もいないことを確認すると、急に屋敷が見たくなる。ところが一同が屋敷の見学を終えて庭に出てきたときに、裏手の道から突然ダーシーその人が現われる。

互いの間隔は20ヤードと離れておらず、その登場の仕方があまりにもだしぬけであったので、彼の視線を避けることは不可能だった。ふたりの目は瞬時に合い、どちらの頬もみるみるうちに真っ赤に染まった。彼はびっくり仰天し、驚きのあまり一瞬棒立ちになっていた。[中略]エリザベスは、あまりの恥ずかしさに、苛立ちを覚えるほどだった。ここへ来たことは、最大の不運、最大の誤りであった!彼の目にはどんなにか奇妙に映ったことだろう! [中略]彼女はこの意地の悪い出会いのことを考へて、何度も何度も顔を赤らめた。(PP,221-222)

この意地の悪い出会いを演出したオースティンは、しかしこれ以上の恥ずかしさにエリザベスをつき落としはしない。ダーシーはエリザベスのペンバリー訪問を、あつかましいとも汚らわしいとも思わず、これまでの高慢とは違って変わった思いやりのある人物として立ち現われ、ふたりはめでたく結婚へと導かれる。お気に入りのエリザベスを、ダーシーからの軽蔑というさらなる恥から救い、この恥ずかしい場面を当のふたりと読者の間だけにとどめておいてやるオースティンの配慮は、こっそりペンバリーを見学に来たというエリザベスの愚かな行為が、実は彼女の恥じてやまない母親のそれと似たり寄ったりであることを考えると、随分と寛大なものであったと言わねばならないだろう。<sup>(23)</sup>

同様のことは例えば、エリナが自分たちのことを都合よく追い出して、ノーランドの屋敷で安逸に暮らす異母兄のことを恥じていながら、晴れて結婚の決まったエドワード本人が、牧師として赴任するデラフォードのことをほとんど何も知らず、

そうしたことにはほとんど興味も持っていなかったのも、家や庭や教区領地や教区の範囲や、土地の状態や、十分の一税の査定などについて一切をエリナ自身から教えてもらうことになったのが、というのもエリナはブランドン大佐から、そ

うしたことを多々聞いており、しかも随分と注意を傾けて聞いていたので、その件についてはすっかり知り尽くしていた(SS,324)

だとか、機嫌をそこねていた彼の母親に詫びをいれるようにエドワードを説得したという挿話からも窺える。また『説得』のアンの場合は、かつて自分と恋人との間を裂いたミセス・ラッセルと通りを歩いているときに、向こうの方からそのかつての恋人で、今は大層出世したウェントワース大佐が歩いてくるのを目撃する。すれ違いざまに、ミセス・ラッセルの目が彼に釘づけになっているのを見たアンは、以前随分と彼のことをけなしていたミセス・ラッセルが、彼の羽振りのよい様子を見て何というかと待ち構えていたところ、

「あなた不思議に思ったことでしょうね」と彼女は言った。「一体何をそんなに長く見ていたのかって。昨夜レイディ・アリシアとミセス・フランクリンがおっしゃってたカーテンを探してましたの。この通りのこの辺りの、道のこちら側のある店の居間用のカーテンは、バース中のどこのものよりも綺麗で上等だとおっしゃっていたのだけど、正確な番地を覚えていなかったの、どれがそうだろうと探してましたの。でもあの方たちのおっしゃっていたようなカーテンは、この辺りでは見当りませんでしたわ」

アンは、自分の友に対してなのか、自分に対してなのかかわからないが、哀れみと軽蔑を感じてため息をつき、顔を赤らめて微笑んだ。(P,169-170)

表にははっきりと現われてはいないけれど、ヒロインたちの内にある外への願望は、身内の者を恥じる気持ちに突き動かされており、しかし彼女たちはその同じ恥を自ら再演することによって、結婚への大きな一歩を踏み出していく。父の力を弱めるというテキストの予防線は、従って、娘たちが嬉々として出ていったときに生じる社会の揺らぎを抑えるためであると同時に、自己矛盾的な行動によって結婚を達成する娘たちを見逃してやる抜け道でもあるのだ。家族を内なる他者として切り捨てることによって出て行く娘たちの未来がたとえどのようなものになろうとも、彼女たちの父親は目をそむけ、決してそれを見ようとはしないだろう。

『マンスフィールド・パーク』が他の作品との間に打ちたてる最も著しい構造上の差異とは、強大な父として君臨するサー・トマス・バートラムを頭とした男系家族をテキストの中心柱に据えたことだろう。他のどの作品にもみられない威厳に満ちた父としてのサー・トマスは、荘園の経営から子供の教育管理に至るまで、すべてにおいての決定権を掌握する。彼の権力は、家族に対する内への厳しい締め付けの力となって行使されるため、対抗的な外部が明確に浮かびあがってこないかわりに、マンスフィールド・パークという共同体は、「他と相容れない、よそよそしい」<sup>126)</sup>存在となって孤立しているようだ。<sup>127)</sup>このような権力の行使は、しかしサー・トマスの性格を豪放磊落なものとして規定するのではなく、むしろ逆に彼の不安や細心な一面を浮き彫りにする。<sup>128)</sup>その性質が読者にはっきりと印象づけられるのが、ファニーを引き取るにあたってサー・トマスがあらゆる可能性を慎重に考慮する場面においてである。

貧しい親戚の子供を引き取り、その養育を肩代わりするという一種の慈善行為は、当時の社会にあっては格別めずらしいことではなかった。<sup>129)</sup>だがサー・トマスにとってファニーを引き取るということは、それまであったマンスフィールド・パークの秩序に変更を余儀なくされるといった意味で、慎重な操作を要する重大事である。

「これからは少々困難なことが起こるでしょう、ミセス・ノリス」とサー・トマスは言った。「娘たちが成長していくにつれ、然るべき境界線をどう引くかということに関してですがね。わたしの娘たちに、自分がどういう身分であるかという自覚をつねに持たせ、しかも従妹のことをあまり見下したりはさせないようにする。そしてこの娘をそれほど落ち込ませないようにしつつ、しかし自分はミス・バートラムではないのだということを忘れさせないようにするということです。3人には仲良くやって行ってほしいし、わたしの娘たちが親類の子にむかって少しでも威張ったりすることは何があっても許さないつもりです。しかしやはり3人は同じにはなれないのですよ。身分、財産、権利、相続の遺産と、これらは永久に違うわけですからね。これは非常に微妙な問題です。しっかりと正しい線に沿ってふるまえるように努力していかなければならないのだから、ご協力くださいよ。」(MP,8)

この引用箇所から明らかになるように、他の小説には登場しなかったサー・トマスのような絶対的な父親の存在によってまず浮上してくるのは、他者と境界線の問題である。<sup>130)</sup>

それではサー・トマスは、何故自分の統治する世界に変異をもたらすような苦勞をあえて引き受けたのか。そもそもファニーを引き取ることにそれほど熱心でなかったサー・トマスの決心を促したのは、自分ではいかなる労もとるつもりはないくせに、万事をしきりたがるミセス・ノリスの次のような助言である。

あなたはご自分の息子たちのことを考えていらっしゃるのでしょうか、でもそれこそこの世のありとあらゆることのなかで、もっとも起こりそうにないとお思いになりませんか？兄と妹のようにいつも一緒に育てられるのですよ。そんなこと道徳的にいって不可能なことですわ (It is morally impossible)。そんなことがこれまであったなんて聞いたことがありません。実際そういう結合を防ぐには、これが唯一確実な方法ですわ。もしその娘が器量よしだったとして、これから7年後にトムかエドモンドが初めて出会ったとしたら、そりゃあ間違いだっておくるかもしれません。[中略]でも今から一緒に育ててごらんさい。よしその娘が天使のように美しかったとしても、ふたりのどちらにとっても妹以上のものにはなりえないでしょうから。(MP,4-5)

このミセス・ノリスの発言は、従兄妹と兄妹の区別を明確にするときに、同じ屋根の下で育てられたかどうかということが大きな意味を持っていたという、当時の社会通念を裏書きするものである。<sup>131)</sup>だが重要なことは、ファニーがマンスフィールド・パークに到着する以前に、サー・トマスとミセス・ノリスの間で決定されていた彼女の指導概要が、ファニーの行動を決定的に呪縛することになるという点である。

ファニーをマライアとジュリアというバートラム家の他のふたりの令嬢と区別し、トムやエドモンドとの結婚を禁止するという絶対命令は、ファニーを相容れない2方向に引き裂くダブル・バインドとして機能する。マライアやジュリアと同じ家庭教師について勉強する機会を与えられたとはいえ、これまで「読み書き裁縫」以外「何も教わってこなかった」(MP,15)ファニーは、そ



の無学のほどを従姉たちから嘲笑されるし、一家の者と同席を許されているとはいえ、彼らの「使い走り」(MP,131)として重宝されているといった具合に、ファニーの家族内での位置づけは、非常に曖昧である。ファニー自身、自らの地位の低さを自覚し、従姉たちとの間に設けられる区別を当然のことだと考えているとテキストは語る。

ファニーは社交シーズンの楽しみの分け前にはあずかれなかったが、家族の他のメンバーが出かけたあと、叔母の相手としてはっきりと役に立つことができたので、楽しかった。[中略]従兄姉たちのお楽しみについては、その話や、特に舞踏会のこと、またエドモンドが誰と踊ったかということについて聞くのが好きだったが、自分の身分を大層低いものだと考えていたので、自分が同じ集いに出してもらえなどと想像したこともなく、従ってそのような話を聞いても、身近なこととは思わなかった。(MP,30-31)

しかしマンスフィールド・パークでパーティが急遽催されることになったとき、大がかりなものでも華やかなものでもなかったけれど、初めての舞踏会を経験することになったファニーは、みんなが踊っている間、自分も踊れる唯一の可能性として、トムが部屋に戻ってきてパートナーとなってくれるのを待ちわびる。しかし戻ってきたトムは踊る気配もみせないで、「ファニーはそれが叶わぬことだと知り、慎み深い性質であったので、そんなことを期待するなんて理性をわきまえないことだったと直ちに感じた」(MP,107)はずなのに、トムがトランプ遊びに引きずり込まれるのを避けるためだけにファニーを強引に誘ったところ、「ファニーはいそいそとして連れ去られたのだった」(MP,108)。ファニーについての語りの信憑性が疑わしいことを示す記述は随所に見いだされるのだが、<sup>100</sup>そのような例から導き出せるのは、ファニーの抱いている同一化、ないしは内への欲望である。<sup>101</sup>実際ファニーは、素人演劇であふれ者となり、姉のマライアとヘンリー・クロフォードの親密さへの嫉妬心に苦しんでいるジュリアに、メアリとエドモンドの親密さに嫉妬する自分自身を重ねて同情する。

こうしたファニーの同一化への、または内への欲望をかきたてるもうひとつの要因とは、彼女のエドモンドに対する恋情である。だが従妹としてのファニーは、

当然その気持ちを人知れず自分の胸だけにおさめていなければならない。<sup>102</sup>だからファニーの側からのみ恋敵と意識されているメアリに勝って、エドモンドとの近さを誇れる唯一の切札とは、彼女がエドモンドの近親者であるということなのだ。従って、アンティグアから帰国したサー・トマスが、余所者を一切排除して身内だけの集いを維持しようとしたときに、ファニーはその案に嬉々として賛意を示すことになるだろう。牧師館との交際もなくなって、クロフォード兄妹が閉め出されたことを残念に思うとほやくエドモンドに対し、ファニーは次のように言う。

私の考えでは、伯父さまは誰であれこれ以上人が加わることを望んでいらっしゃらないでしょう。伯父さまはあなたがおっしゃった静けさを高く評価なさっておいでですから、家族団欒の安らぎだけを求めていらっしゃるのだと思います。(MP,177)

こう述べるファニーは、自らもその家族の一員として、内部の人間の視点から語っている。

だがファニーの強烈な内への志向を阻むのは、逆説的にも彼女とエドモンドが従兄妹同士であるという事実だ。口に出しては言わずとも、ファニーがエドモンドを欲していることは明白であり、<sup>103</sup>しかしファニーとエドモンドの結婚は物語の最初から禁じられている。だからファニーがエドモンドのいるマンスフィールド・パークに留まりなければ、彼女はエドモンドへの思いを隠し通さなければならない。とすれば「道徳的に不可能」だという託宣の下されたエドモンドとの結婚に可能性を見いだすためにファニーができるせめてものことと言えば、自らが道徳の体現者となって、不道徳な行為に走るマンスフィールド・パークの人々から、自分を差異化しておくことくらいではなかったか。

かくしてサー・トマスの指導と管理のもとで、同一化と差異化の欲望に引き裂かれながら、内への欲望を募らせていくファニーは、父権性というイデオロギーの深謀について、何も知りえない無垢で無知な娘である。それに比べて、マライアを愚鈍な富豪のラッシュワースに嫁がせ、エドモンドを牧師にさせようとするサー・トマスについて、「外国の土地を開拓して、無事に帰還した暁には神々に生贄を捧げた昔の異教の英雄を思わせる」(MP,97-98)という舌鋒をふるうメアリ・クロフォードは、もし彼女がヒロインであったなら、その才気煥発さによって、さぞや父権社会の脅威となりえた

かもしれない。<sup>144</sup>たとえメアリが世のあらゆるものにおかしみを見いだせると思うほどに自らの優越性に自覚的であり、自信を持っていたとしても、それがまんざら自信過剰のせいではないと思わせるほどによくものが見える彼女は、マンスフィールド・パークの大方の人にとっていないも同然のファニーの存在を認め、その奇妙な位置づけに興味を抱く。メアリの「ねえ、ミス・プライスは社交界に出いらっしやるの、それともまだなのかしら」[Pray, is she out, or is she not?] (MP,43)という一見無邪気な問いかけが、(少なくともファニーにとっては)一種のアイロニーを帯びて聞こえてしまうのは、この問いがまた、ファニーがマンスフィールド・パークの内部の人間として認められているのか、それとも外部の他者なのかといった意味合いにも読めてしまうからだ。サー・トマスによって、まさに境界線に配置されたファニーはひたすら内への欲望を募らせるけれども、世間智を持たないファニーが知らなかったのは、この謎々のような問いかけが、父権制下においてはまた別の解答を持っていたということだ。そしてファニー以外の人にははっきりと見えなかったマライアとジュリアとヘンリーの恋の鞘当てごっこにしても、サー・トマスの計算高い圧政ぶりにしても、あらゆることが見えていたメアリが、ファニーのエドモンドに対する気持ちだけは見抜けなかったのは、エドモンドに恋しながら内への志向を強めるというファニーの行動が、父権制下における公式からまったくはずれた、見当違いのものだったからに他ならない。

ではこの問に対する正しい解答とは何であったのか。マライアがラッシュワース氏と結婚し、妹のジュリアを伴って屋敷を出ていくと、ファニーの地位は急速に高まっていく。利口なメアリの言葉を借りるなら、まさに「誰もが遅かれ早かれ、誰かに取ってかわられる」(MP,251)運命にあるのだから。外出したり、晩餐に招かれたりする機会も増え、ついにはファニーと兄のウィリアムのために、サー・トマスはダンス・パーティまで催してやる。綺麗にしつらえたファニーを見て、サー・トマスは「器量以外のすべてのもの——彼女が身につけた教育やら作法やらを与えてやったことに満足」(MP,250)をおぼえ、「清澄な真空地帯」<sup>145</sup>のような、突き抜けて能天気なレイディ・パートラムはといえば、自分の小間使いを気付けの手伝いにやったためだと喜び(実際のところその手伝いは間に合わなくて不要だったのだけれど)、それぞれが自分の親切な行為に満足しているうちにダンスは始まって、ファニーはサー・トマスの

命令で、ヘンリ・クロフォードと共に列の先頭に立つことになる。

ファニーはほとんど信じられないような気持ちだった。こんなに大勢の上品な令嬢たちの先頭に立つなんて!こんな名誉は身にすぎるものだわ! 従姉たちと同じ扱いを受けるなんて! そして彼女の思いはここにいない従姉たちへと向かい、偽りのない心からのやさしい気持ちで、彼女たちがこの部屋の然るべき場所において、きっと喜んだに違いないこの楽しみを共有できればよかったのにと残念に思った。(MP,250)

従姉たちにとって代わり、ファニーがあれほど望んだマンスフィールド・パークの中心に迎えられてヘンリと踊ったとき、彼女の運命はすでに決まっていたはずである。待つほどもなくヘンリはファニーに求婚し、断ったファニーに対してサー・トマスが怒りを爆発させることは当然の成り行きであった。なぜなら中心にきた娘とはすなわち、一番乗りで外部の市場に売りに出されることになる、その家の看板娘であることを意味するのだから。内を目指すということは、だからまさに外を目指すということに他ならないのだ。このことがオースティンの他の小説ではなく、『マンスフィールド・パーク』というテキストの示差特徴として浮上してくる理由は、『マンスフィールド・パーク』ではファニーはまずパートラム家に引き取られてサー・トマスからの娘教育を受けるという第一段階をへたのち、ポーツマスの実家から再度パートラム家へ迎えられるという二段階の手続きを踏んでおり、他の小説では、その第一段階が暗黙の前提として省略されているという根本的な構造上の差異が存在するからだ。『マンスフィールド・パーク』とは、他の小説があらかじめ消化してしまい、不在の形で内包している過程をも含めて描いた小説なのであり、その意味でファニーという人物は、いわばエリザベスやエマたちの陰画としてのヒロインなのだ。

この擬似的クライマックスにファニーを至らしめることになったのは、サー・トマスの父権的戦略であったと同時に、ファニー自身が言葉とは裏腹に、強烈な中心への欲望を持っていたためであるだろう。自分のような低い身分の者には望むべくもないと引いてみせるファニーのお上品な擬態を、語り手は見逃さない。従姉たちにとって代わってのダンス・パーティが、ファニーにとっていかに心躍るものであったかということにつ

いて、語り手はファニーが「ノリス伯母さまに絶対に気づかれない間は、客間でステップの練習をしていた」(MP,247)ほどのしゅぎぶりであったことを、こっそりと読者に教えてくれる。

目前にせまった舞踏会については、あまりにも心を乱されるほど不安であったために、本来なら感じるべき胸踊るような期待感の半分も感じる事ができなかったのだが、そうした期待感は、こうした出来事を、もっと心落ち着けて待ち受けることができる他の大勢の令嬢たちにはきっと起こりえたはずで、なぜなら彼女たちにとっては、こうした状況はファニーに比べると目新しさも興味も特別な喜びも少ないはずだからだ。招待客の半分にしか名前が知られていないミス・プライスが、今初めてお目見えすることになり、その夜の女王とみなされるかもしれないのだ。ミス・プライスほど幸福な人などありえたのだろうか？だがミス・プライスは社交界に出て売り物になるように育てられたのではなかった。(MP,241)

語り手の強烈なアイロニーは、なによりもファニーを「ミス・プライス」と呼んでいることに現れている。ファニーは決して中心にくるような人物ではないのだということを、ここで語り手はからかい口調ながらも、はっきりと断言しているのである。<sup>66)</sup>

サー・トマスの逆鱗にふれてポーツマスの実家に戻されたファニーは、家の小ささと乱雑ぶりにただただ呆然とする。この場面の描写がオースティンにしては異様なほど激しいものであることは、すでに指摘されているとおりである。<sup>67)</sup>「騒音、混乱 (disorder)、下品さ」そして不潔な様子が前面に押し出され、<sup>68)</sup>ウィリアムが航海に出たあとでは、家族の誰に対しても愛情はなかなかわき上がってこない。子供たちの乱暴さが不愉快であるのはもちろんのこと、両親に対する失望はさらに大きい。

父親については、ファニーは終始期待をもっていなかったのだが、覚悟していたよりもずっと、家族のことはほったらかし、習慣も悪くなって、態度はますます下品になっていた。[中略]悪態について酒を飲み、不潔で粗野だった。[中略]母親への失望は、さらに大きいものがあつた。この点についてはファニーはかなり期待をかけていたのだ

が、ほとんど何も見出しえなかった。(MP,354)

こういう状態であったからには、ヘンリの訪問を受けたファニーの顔が「青ざめた」としても無理はないだろう。しかしミス・プライスの態度は「これまでで最上のもの」(MP,364)であり、そのあと散歩の途中で出会った父親も、「ファニーがほっとしたことには」「全く別人のよう」で、その「態度は洗練されているとはいえなかったものの、まずまず以上のもので」あつたし(MP,367)、さらに翌日の日曜日にヘンリが再度現われたときには、一家は教会へ出かけようとしているところだったので、常とは違って「引き立って見えた。」

造化の神は、彼らに相当の美貌を分け与えており、毎日曜には肌も清潔で、よそゆきの服を着けていた。日曜日にはこうしていつでもファニーはほっとするのであつたが、今日はいつもにもましてそうだった。(MP,372)

ダンス・パーティの頃から一段とアイロニーの色合を濃くしていった語り手は、ここでも思う様、その力を発揮しているといえるだろう。ヘンリが訪問している間のファニーの落ち着きない狼狽ぶりは甚だしい。作者の計らいによって、ファニーはヘンリに両親の最悪のところを見られるという恥は免れており、むしろヘンリの目にはそこそこの家族として映っているというのに、ファニーは必要以上に家族を恥じている。だから「イギリス全土を探しても、利口で感じのよい男性に求められるという不運に耐えるよりも、近親者の粗野なふるまいを見て逃げ出されるほうが耐えやすいなどと思ったりする令嬢などいないでしょう」(MP,366-7)と語り手はすかさず合いの手を入れて、ファニーに対するアイロニーを一層際立たせようとする。例えばオースティンの他のヒロインたちの場合は、身内を恥じ、しかしその同じ恥を自分で繰り返すという愚行に一瞬走る。そして語り手はその愚かしい行為をそのまま読者に伝えることによって、アイロニーの表明としていた。それに対しファニーの場合は、ポーツマスの家族に対して彼女が感じる恥と共犯関係にあるというのではなく、マンスフィールド・パークで教え込まれた価値観に従って実の家族を嫌悪しているのであり、そのファニーの驕慢に向けられる語り手のアイロニーは、およそ容赦がない。

だが家の乱雑ぶりや家族の下品さと、マンスフィー

ルド・パークの調和のとれた秩序を対比させるファニーのイデオロギーが最終的に暴かれるのは、マンスフィールド・パークの人々が犯した一連の恥知らずな行為と、ファニーを迎えにいくという旨が記された手紙がエドモンドから届いたときである。

明日ポーツマスを出るのだ！ ファニーはあんなに大勢の人たちが惨めな思いをしているというのに、途方もない幸福感を覚えるという恐るべき危険に陥りそうになった。向こうで起きた災難が、自分にこれほどの恵みをもたらしてくれたのだ！ ファニーは、そんな災難に無感覚になってしまう術が身についてしまうのではないかと恐れた、(MP,404)

しかしその幸福感は抑えようもなく、翌日エドモンドが迎えにきた馬車に乗って家を離れたときには、「ファニーの心に喜びと感謝の念がこみあげてきた」し、妹のスーザンの顔には「微笑みがいっぱいに広がった」が、その笑みは「帽子の陰に隠れて見えなかった。」(MP,406) 実家を恥じたファニーは、マンスフィールド・パークで起きた恥づかしい行為を喜ぶという恥しらずな行為を幸福のうちに犯し、まさにその恥の中へ嬉々として戻っていくのである。

ファニーをポーツマスに帰すことで明らかになったのは、「マンスフィールドこそが今ではわが家」(MP,392) だと思ふほどに、ファニーがマンスフィールド・パークの価値観にすっかり染まってしまったということである。それは言うてみれば、ポーツマスの家族とその混乱ぶりを恥と思ひ、マンスフィールド・パークの混乱を秩序とみなす価値観である。こうした矛盾と盲目についての語り手の非難がどれほどのものかはすでに見た。だがサー・トマスにとってこのファニーの価値観とは、まさにマンスフィールド・パークで彼がおこなった教育と指導の賜だと言えはしないか。ファニーをマンスフィールド・パークへ移植 [transplantation](MP,250) して以来、<sup>403</sup> 彼が与え続けてきた指導の成果は、ポーツマスに帰ったファニーに家族を恥じさせるその価値観として証明されたのではないか。だからこそ一度はサー・トマスの言いつけにそむいて追放されたファニーが再度、そして今度は「まさにサー・トマスがほしいと思っていたとおりの娘」(MP,431) として、マンスフィールド・パークに受け入れられることになったのではないだろうか。最初マンスフィールド・パークに移されたときには細心の注意を払って実の娘たちとの間に見えない境界線を

設け、教育と指導を与えてきた「他者」のファニーが、いつの間にか本当の娘以上にマンスフィールド・パークの価値観を体得し、実の家族を他者として切り捨て、移植先のマンスフィールド・パークを実家と見做すようになったとき、あくまでも他者としての差異を孕みつつ、マンスフィールド・パークへの同一化を達成したことに對する報酬として、身内であるエドモンドとの結婚が晴れて認められることになるだろう。<sup>404</sup> エドモンドが小説の終末近くになってようやくファニーを愛の対象とするくだけは次のようなものであった。

彼は愛の対象がいなくなってからっぽになった心のまま、メアリのあとを引き継いでくれる人を待ち望む必要はなかった。メアリ・クロフォードのことを断念し、あのような女性とこれから先出会うことなどないだろうと言った瞬間から、まったく違ったタイプの女性とでも同じくらい、いやいや、もっとずっと上手くいくのではないかと思い始めていた。[中略] 私がただ皆様に信じていただきたいと思うのは、それがそうになって自然だと思えるちょっさりその時に、それより一週間早いということもなく、エドモンドはミス・クロフォードのことを思うのをやめて、ファニーと結婚したいと、ファニーが思っていたのと同じほど強く願うようになったということなのだ。(MP,428-429)

メアリからファニーへと心移したエドモンドの愛が、「3日のうちに2度も結婚の申し込みをした」(PP,113) コリンズ氏と比べて、どれほど強いものだったのかという疑念が頭をかすめないでもないこの箇所の歯切れの悪さは、ファニーのマンスフィールド・パークへの同化と、エドモンドという身内との結婚に至る過程を、先程述べたようにテキストの論理に従って跡付けることによってしか解消されないのかもしれない。<sup>405</sup>

かくしてファニーは長年にわたって抱き続けてきた願いが叶い、マンスフィールド・パークに属する人間となる。だがそれはテキストが一見そう読ませたがっているように、ファニーの道徳心の篤さが報われたというわけでないことはすでに明らかであるし、またファニーはたとえ比喩的な意味であれ、マンスフィールド・パークの後継者となるわけでもない。<sup>406</sup> 後者の点については、リアリズムのレヴェルで、トムという長男がマンスフィールド・パークの「復帰財産」(reversion) と「准男爵の位」(MP,42) を継承することになっているという、

当時の社会の制度に抵触することのないプロットを、オースティンが打ち出しているという点は、押さえておくべきである。<sup>443</sup>その上で、テキストからトムが存在がほとんど消されてしまっていることの意味が問われなければならない。<sup>444</sup>ファニーがマンズフィールド・パークに引き取られる以前から、彼女とトムないしはエドモンドとの結婚は暗黙の禁止事項として確定されていた。しかしファニーに対して、あるいはメアリに対してもそうであったが、何の特別な興味も見せないまま早々にテキストから退場していくトムの場合は、いわば向こうから物語への関与を放棄しているようなもので、禁止の必要などまったくない。<sup>445</sup>つまりこの禁止が打ち出された時点から、ファニーはその禁止が発する力のダイナミズムに従って、次男のエドモンドと結婚することが定められているのだ。<sup>446</sup>別の表現を用いるならば、オースティンはファニーをテキストの中心に着地させるつもりなど、はなからなかった。結婚後、グラント氏の突然の死という降ってわいたような幸運のおかげでマンズフィールドの聖職禄が手に入ったエドモンドとファニーは、やがて長男のトムが継承することになるマンズフィールド・パークに戻り、敷地内のどこか周縁部に落ち着いて、ささやかな幸福を享受することになるのである。<sup>447</sup>

ファニーをマンズフィールド・パークに「移植」したサー・トマスは、彼女の教化において見事な成果をあげる。自分の王国の価値観を徹底的にたたき込み、ポーツマスで身につけていた「粗野」(MP,407)なもの一切から彼女を教化する。そしてファニーの内にマンズフィールド・パークへの同化の願望を芽生えさせ、野蛮な身内を他者として排除させる。教化の完成したファニーを、マンズフィールド・パークに迎えて身内のエドモンドと結婚させ、彼ら夫婦を「マンズフィールド・パークの視界と保護のうちにある」(MP,432)片隅の牧師館に据えて、ささやかな幸福を約束する。<sup>448</sup>『マンズフィールド・パーク』というテキストについての解釈=物語は、無数に存在しうるだろうし、それらの物語は様々に異なる視点から語られうるものだろうが、もしサー・トマスの視点に立って、彼が紡ぎだそうとした物語を辿ってみるならば、今述べたような教化と排除と同族結婚の物語として纏めあげることができるのではないだろうか。とするならば、この物語はサー・トマスという人物を規定するある特性に、もの見事に直結するのではないか。別の言い方をすれば、サー・トマスがファニーに対して実践したこの教化の物語が、プランテーション経

営者としてのサー・トマスが、どこか他の場所でおこなっていた、テキストには書かれていない物語の反復であったという可能性もまた否定できないのではないか。それは例えば次のような物語であったかもしれない。

我々が現在利害関係を見いだしつつある土地の原住民たちは、最終的にどのような運命にあるのだろうか?想像がつくのは次の3つの可能性である。

原住民の駆除撲滅。

彼らの完全な、あるいは部分的な教化。隔離された者として生かし、教化する過程で、ヨーロッパとの接触によって受ける害悪から注意深く遠ざける。

植民地開拓者との合併。[中略]合併とはつまり、同じ共同体内で、例えば主人と召使として、仕事仲間として、同郷の市民として、可能であるなら異族間の同族的結婚によって、開拓者と原住民が結合することである。<sup>449</sup>

この全く別の物語と並列することが、『マンズフィールド・パーク』の解釈に何をもちあわすのかは断定できない。<sup>450</sup>だがこの物語に付け加えるとすれば、植民地主義者が原住民を教化して、結婚という形で自らの文化の中に同化させたとき、次に彼らが取るべき手段とは、原住民の同化を喜びつつ、あくまでも内なる他者として周縁に留めおくだらうという点だ。ファニーの玉の輿物語は、他者の取込という観点から読むかぎり、おそらく様々な他の物語へと開かれることだろう。植民地の物語は、その中のひとつにすぎない。しかしその物語が、『マンズフィールド・パーク』のエンディングで、なぜファニーが中心からずらされた位置に留めおかれるのかという問題に暗い光を投げかけるとき、ファニーが担う陰画としてのヒロインの役割がオースティンのコーパスにおいて果たす重要な意味を確認できるのではないだろうか。

ここで復習しておくならば、エリナの結婚相手のエドワードは、長男としての特権を弟のロバートに奪われていたし、エリザベスはダーシーとの結婚が決まるにあたって、彼の叔母のレイディ・キャサリンの不愉快な妨害にあった。エマはナイトリーとの結婚によって、彼の財産が甥に譲られる可能性を阻むことになるし、アンの夫は海軍にいて、いずれ戦争に参加するという暗い見通しが指摘されていた。これらのヒロインたちが明朗快活で、不幸という言葉などまるで無縁に見える

のは、実は彼女たちが陽面の部分を体現しているからにすぎないのではないだろうか。『マンズフィールド・パーク』においても、トムを病気にすることで、相続権があたかもファニーの方へ移されるかのように読ませたがっているふしのあるオースティンは、しかしファニーをエドモンドと結婚させることによって、きっちり彼女を中心からずらしたように、<sup>(61)</sup>他のヒロインたちについても、最初は頓挫するかと思われた結婚が実現したという喜びの陰で、彼女たちの未来の全き幸福に、留保をつけることを忘れなかった。オースティンのヒロインたちが幸福な結婚へ飛び立つために後に残していったものと、その結婚の向こうで彼女たちを待ち受けるものについての疑念が、彼女たちを「反転」し、その「前史まで逆行」(reversion)させたファニーを描くことではからずも浮上してくることになるのだが、しかしそれはからずもと言うことにごく抵抗を覚えるのは、おそらくオースティン自身の中にあつた抑圧のイデオロギーさえも越えて、真情の一端を垣間見させてしまう語りの公正さのためであり、その公正さに力を得て、『マンズフィールド・パーク』の陽面としての他の小説を見えないところで支える植民地支配の言説の存在と、その言説に対するオースティンの懐疑を指摘することによって結論としたい。<sup>(62)</sup>

#### 註

- (1) Ruth Bernard Yeazell, "The Boundaries of Mansfield Park," *Representations* 7 (summer 1984), p.134; Joseph Litvak, *Caught in the Act* (Berkeley: University of California Press, 1992), p.4 参照。
- (2) R. F. Brissenden, "Mansfield Park: Freedom and the Family," in John Halperin ed., *Jane Austen: Bicentenary Essays* (Cambridge: Cambridge University Press, 1975), p.156.
- (3) Ed., Deirdre Le Faye, *Jane Austen's Letters* (Oxford: Oxford University Press, 1997), p.201.
- (4) Jane Austen, *Mansfield Park* (Oxford: Oxford University Press, 1985), p. 253. 以下このテキストについてはこの版を用い、MPとして本文中に頁数を記す。
- (5) John Wiltshire, *Jane Austen and the Body: 'The Picture of Health'* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), p.64.

- (6) Tony Tanner, *Jane Austen* (Cambridge: Harvard University Press, 1986), p.143.
- (7) Mary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen* (Chicago: The University of Chicago Press, 1985), p.212.
- (8) ファニーの道徳的な人物としての性格づけと、それについての語り手のアイロニーについては、Alistair M. Duckworth, *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1971), p.75 を参照。
- (9) 手紙の中でオースティンが"Ordination"についての小説を書くこと述べていることから、従来はこのテーマを主題としてオースティンが『マンズフィールド・パーク』を執筆したと考えられてきたが、注釈者によると、その手紙を書いたときには、オースティンはすでに小説の半ばまで書き進んでいた。Letters, pp.202, 411 参照。
- (10) "Mrs. Oliphant on Jane Austen 1870," in B. C. Southam ed., *Jane Austen: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul; New York: Barnes & Noble, 1968), p.217.
- (11) Claudia L. Johnson, *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel* (Chicago: The University of Chicago Press, 1988), p.96.
- (12) Tanner, p.143.
- (13) Letters, p.275.
- (14) Jane Austen, *Pride and Prejudice* (Oxford: Oxford University Press, 1990), p.209. 以下このテキストからの引用はこの版によるものとし、PPとして本文中に頁数を記す。
- (15) Jane Austen, *Persuasion* (Oxford: Oxford University Press, 1990), p.234. 以下このテキストからの引用はこの版によるものとし、Pとして本文中に頁数を記す。
- (16) Jane Austen, *Emma* (Oxford: Oxford University Press, 1995), p.137. 以下このテキストからの引用はこの版によるものとし、Eとして本文中に頁数を記す。
- (17) Jane Austen, *Sense and Sensibility* (Oxford: Oxford University Press, 1990), p. 97. 以下このテキストからの引用はこの版によるものとし、SSとして本文中に頁数を記す。

- (18) Daniel Pool, *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew: from Fox Hunting to Whist - the Facts of Daily Life in 19th-century England* (New York, London: Simon & Shuster, 1993) の中の、'Entail and Protecting the Estate' の項目を参照。
- (19) この点に関しては『エマ』だけが例外であり、そのことが『エマ』という作品の心地よい軽快さに関係しているのかもしれない。
- (20) Johnson, pp.76-77.
- (21) Mary Ann O'Farrell, *Telling Complexions: the Nineteenth - Century English Novel and the Blush* (Durham: Duke University Press, 1997), pp.17-18.
- (22) *Ibid*, p.20.
- (23) David Southward, "Jane Austen and the Riches of Embarrassment," *Studies in English Literature 1500-1900* 36 (1996), pp.771-772 では、エリザベスとダーシーがのちに2人がペンバリーで鉢合わせしたときのことを回顧する場面と「狼狽」について論じられている。
- (24) Yeazell, p.135.
- (25) 「サー・トマスが外部の世界に対して内を守ろうとする態度は、『マンスフィールド・パーク』というテキストにおける孤立への傾向を典型的に示している。」Glenda A.Hudson, *Sibling Love and Incest in Jane Austen's Fiction* (London: Macmillan, 1992), p.47.
- (26) アンティグアから帰国したサー・トマスが、イエーツ氏を嫌って厄介払いしようとするのは、彼の抑圧のせいで子供たちの中にたまりにたまった外への欲望を一気に体現したようなイエーツの絶叫が、常にサー・トマスの中にあった不安を不意打ちしたことに対して怒りをおぼえたからとも読めるだろう。
- (27) 実際オースティンの家庭においても、2番目の息子のエドワードが、父の従兄弟にひきとられた。Penny Kane, *Victorian Families: Fact and Fiction* (London: Macmillan, 1995), p.4 参照
- (28) 『マンスフィールド・パーク』における境界線の問題については Yeazell を参照。
- (29) Glenda A. Hudson は、メアリ・クローフォードが、従兄妹同士であるファニーとエドモンドを、同じ屋根の下で育てられた兄妹としてとらえている点に着目している。Hudson, p.35.
- (30) Douglas Murray, "Spectatorship in *Mansfield Park*: Looking and Overlooking," *Nineteenth-Century Literature* 52 (1997), p.18.
- (31) Paula Marantz Cohen, "Stabilizing the Family System at Mansfield Park," *ELH* 54 (1987), p.679.
- (32) 「エドモンドを愛すること、欲すること、さらには彼と結婚したいとまで思うことは、ファニーの世界をきっちりとまとめあげている基本的な社会のおきてを犯すことである。」Wiltshire, p.66.
- (33) D.A.Miller, *Narrative and Its Discontents: Problems of Closure in the Traditional Novel* (Princeton: Princeton University Press, 1981), p.56.
- (34) Naaja A. Stewart の場合は、父権制が女性のセクシュアリティをコントロールできなかったことと、サー・トマスの植民地経営者としての権威の弱さに関連していると考えられる。*Domestic Realities and Imperial Fictions: Jane Austen's Novels in Eighteenth - Century Contexts* (Athens and London: The University of Georgia Press, 1993), p.110.
- (35) Johnson, p.99.
- (36) ファニーはポーツマスに戻ったときにも、自分のことが話題にならないで悲しい思いをする。*Mansfield Park*, p. 348.
- (37) Tanner, p.146.
- (38) Yeazell は、ポーツマスの描写に見られる「不潔さ」に着目している。Yeazell, p.134.
- (39) この奇妙な植物の比喩は、例えば「植民地とは、熟すまでの間ぶらさがっているだけの果物のようだ」という言い回しに類似するものがある。J. R. Seeley, *The Expansion of England: Two Courses of Lectures* (London: Macmillan, 1921), p.44.
- (40) Eileen Cleere は、ファニーの結婚を「族外婚と近親相姦の折衷案」的な意味を持つものと考えられる。"Reinvesting Nieces: Mansfield Park and the Economics of Endogamy," *Novel* 28 (1995), p. 129.
- (41) Tanner はファニーの結婚を、オースティンのヒロインたちの結婚のなかで、もっとも性的要素のないものとみなしている。Yeazell の場合は、オースティンの激しい性欲への嫌悪と、ファニーとエドモンドの結婚があたかも兄妹の結婚のように描かれたことを関連させている。Tanner, p.173; Yeazell, p.149.
- (42) Susan Fraiman は、Edward Said がファニーをマンスフィールド・パークの後継者として位置付けている点について、不正確であると指摘している。

- “Jane Austen and Edward Said: Gender, Culture, and Imperialism,” *Critical Inquiry* 21 (1995), p.811.
- (43) 長子相続という制度の社会的意味については、Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500 - 1800* (Harmondsworth: Penguin, 1990), pp.71 - 72 参照。
- (44) この点について、Roger Salesは当時の社会的コンテキストと関連づけながら、Regency に対するオースティンの批判が、Prince Regentに準えられる放蕩息子トムを生み出したのだと考える。歴史的事実を、テキストで描かれている事象に一対一対応させるだけのSalesの手つきは洗練されているとは言い難いが、『マンズフィールド・パーク』におけるトムの不在という、テキスト解釈の鍵ともなるべき重要問題について積極的な解答を打ち出したという点で、彼のこの著作は評価されるべきである。*Jane Austen and Regency England* (London and New York: Routledge, 1994) 参照。
- (45) Susan Fraimanによれば、『マンズフィールド・パーク』には最初から「長子相続に対する非難」がある。Fraiman, p.811.
- (46) 長子相続という制度下で younger sonsがおかれた状況については、例えば Jessica Gerard, *Country House Life: Family and Servants 1815 - 1914*; Lawrence Stone & Jeanne C. Fawtier Stone, *An Open Elite: England 1540- 1880* を参照。
- (47) Hudsonは、トムとファニーの妹スーザンとの結婚の可能性を示唆している。確かにスーザンはファニーほど臆病ではなく、機転もきくと書かれているが、本稿で分析したテキストの論理に従うなら、この案に賛同することはできない。
- (48) Kathryn Sutherlandは、テキストの冒頭で提示された、ファニーとエドマンドの結婚禁止のかけに、兄妹の結婚は制限的なものではなく、生産的であるというメッセージを読み取っている。“*Jane Eyre’s Literary History: The Case for Mansfield Park,*” *ELH* 59 (1992), p. 416.
- (49) Herman Merivale, *Lectures on Colonization and Colonies* (London: Longman, 1861), pp.509 - 511.
- (50) 『マンズフィールド・パーク』を植民地の言説との関連から読んでいる論文としては、Michael Steffes, “Slavery and *Mansfield Park*: The Historical and Biographical Context,” *English Language Notes* 34 (1996); Maria Ferguson, *Colonialism and Gender Relations from Mary Wollstonecraft to Jamaica Kincaid: East Caribbean Connections* (New York: Columbia University Press, 1993); Stewart, *Domestic Realities and Imperial Fictions* を参照。
- (51) 『マンズフィールド・パーク』のエンディングをアンチ・クライマックスとみなす Johnson に対し、Hudsonはその見解に真っ向から反対しているが、筆者は当然ながら、後者の意見には賛成できない。
- (52) この結論は、サイードの *Culture and Imperialism* に収録されている「マンズフィールド・パーク」論での些か手荒な読解が、マイノリティを特権化したいという彼の性急な欲望に押されて、すでに彼の中にある望ましい結論を正当化する過程でしかなく、テキストの細部が語ろうとしている微かな声を握りつぶしてしまっているのではないかという批判の立場から分析をおこなった結果導き出されたものであることを付言しておきたい。